

治安の悪い関西弁の妖しい激メロお兄さんと手違いでルームシェア!?
寸止め調教からどろどろ凌辱で一人で生きられない身体にされて依存まで完堕ちさせられました

サンプル（一部抜粋）

「ひ……」

目の前に立つ、背の高い上裸の男。

整った顔、口に咥える煙草、身体を纏うような大きな入れ墨。

「…俺の家に何の用？」

低い声…。鋭い眼光。関西弁…。

治安が悪すぎる……。

私はただ転勤で引っ越してきただけなのに、初日からやらかしちゃった…!?
怖いお兄さんから目をそらし、頭を下げ

「ご、ごめんなさい…!」

と叫んで慌てて家を出る。

「…あれ？」

部屋番号を見て、契約書を確認する。

間違っていない。

「……」

じゃあ…さっきの怖い人が間違ってるのかな。

ど、どうしよう…。また部屋に戻って、さっきの人と話さなきゃいけないのかな……。

絶対にヤバい人だね。

どう…しよう…。

何度も部屋番号と契約書を見比べ、間違っていない事を確認して立ち尽くす。

でもいつまでも突っ立ってるわけにもいかず、私は小さく息を吐いて、覚悟を決めて…ゆっくりとドアノブに手をかけた。

「……」

ごくつと生唾を飲む音が耳に響く。

ゆっくりとドアを引いて、中を伺う。

「…なにしてるの。」

でもその瞬間に、低い声が聞こえてきて、身体がビクッと震えた。

「あ、あの……！」

「……うん。」

「こ、ここ！私の家だと……思うん……ですが……」

声はわずかに震え、上ずっている。

怖いお兄さんは少し首を傾げ、ちらっと近くに置いてあった契約書へと視線を落とす。

「……301号室やんな？」

「は、はい……」

「じゃあ間違っていないわ。」

「え……？」

ふーっと煙草の煙を吐き出し、私の顔をじっとみつめてくる……。

どこか値踏みするような、ねっとりとした視線に感じて、それが恐ろしくて身体が縮こまる。

「で、でも……私も301号室で……」

私は床に視線を落としたまま、小さな声で絞り出すように呟く。

「……」

じゅっと煙草の火を消す音が響き、お兄さんが私の方向へとゆっくり近づいてくる足音が聞こ

える。

「っ……！」

「なあなあ、もしかして新手のナンパ？」

お兄さんはスツと私の顔を覗き込んで、少しからかうようにそう言ってくる。

(中略)

「……さてと。手伝うわ。」

じゅつと煙草の火を消し、私に向き直る京介さん。

「え？」

「荷物。」

片付けなあかんやろ？」

「あ、は、はい……」

「俺のはもう片付け終わってるから。手伝うわ。」

ニコツと爽やかに微笑み、重い段ボールを軽々と持ち上げる。

「あ、ありがとうございます……！」

案外優しいのかも……。

「紗季ちゃん、これは？どこに運ぶん？」

率先して片付けをしてくれる京介さん。

緊張気味の私を安心させるためか、にこやかに色んな話をしてくれる。

仕事のために関西から引っ越してきたこと。

年齢は30歳なこと。彼女はいいこと。

色んな話をしてくれて、私も少しずつ警戒心が解けていった。

(中略)

片付けが終わると、

「がんばったな。」

と京介さんに頭を撫でられ：

「腹減ったか？」

と甘やかすように聞かれる。

「ちよつとだけ：」

「じゃ、なんか簡単に作るわ。」

京介さんは軽くそう言って、手際よくご飯を作ってくれる：。

第一印象は怖い人だったけど、なんだかギャップがすごいな。

一緒に住む事になった時は不安だったけど、京介さんとなら楽しく暮らせそう。

この時点で私は完全に油断してしまっていた。

(中略)

「ちゃんと綺麗にしとかなあかんからな。」

京介さんは親指と人差し指でぎゅむっと乳首をつまみ、両方の乳首をゴリゴリと同時に擦り始める。

「んう、あ、あ、あ……や、まって……つ、ああ、あ……つ」

身体がビクビクする度に、乳首をこねる指に力がこもっていく……。

「あああ、や、だ……つ、京介……さ……んっ、乳首、いや……っ……」

鏡に映る私の顔は、真っ赤に染まっていて、だらしなく口を開けて泣きそうな顔をしていた。私の後ろに立つ京介さんは、そんな私を楽しそうに見つめていて……それが何よりも怖かった。

「どうしたん？」

耳元でクスクスと意地悪く響く声……。

「あ、あ、乳首……やめ……て……おねがい……っ、あ、あ……っ」

「綺麗に洗ってるだけやのに、可愛い声出してんの？」

「あああ……っ、ちが……あ、あ、あ……」

「困るなあ。ただ洗ってるだけやのに。」

「発情したらあかんやん。」

クスクスとあざ笑うように響く声……。絶対に洗ってるだけなんかじゃないのに、こんなのおかしいのに……鏡に映る私の乳首はピンピンに勃起してしまっていた……。

「は……あ、あ、やだ……っ、乳首ごしごし……や……あ、あ」

ビクビクしながら声を漏らす私を満足そうに見る京介さんは、もう優しいお兄さんになって見えなくて……ただただ恐ろしかった。

「乳首おしまいにする？」

笑いながらそう聞かれ、私は何度も何度も頷いた。

「しゃあないなあ。じゃあおしまいな。」

そう言いながら乳首からようやく指を離してくれた……。

けどその手は私のお腹へと滑っていく……。本能的にまずいと思った。

（中略）

「あ、あ、だめ、だめ……っ、クリ触っちゃやだ……!!」

「はは。クリは触ったらあかんの？」

「う……ん、あ、あ、ひ……ああ」

「分かった分かった。」

クスクスと低く喉を鳴らすような笑い声。

その次の瞬間、ぐじゅっ♡と中に指を入れられた。

「ひぐ…ぞ、あおあつつ」

「あーあ。まんこトロトロになってるやん。」

楽しそうに笑いながら、中でぐちゅ♡ぐちゅ♡と指を動かされる。

「ああああ、だめ、も、無理…だから…あつ、あ…」

「イきそう？」

「う、ん、もお、無理、やだ…あおああつつ」

イきたくなんてなかったはずなのに…もう限界だった。

ただどその瞬間、またぐちゅ♡と指を引き抜かれ、シャワーの刺激もなくなってしまった。

「は…あ、あ……なんで、え…あ…」

あと少しだったのに。もう少しでイけたのに…。

身体がヒクヒクして、熱くてぼーつとする…。

「紗季ちゃん、もう風呂出て大丈夫やで？もう終わり。」

「おわ…り…:…?」

「ん？うん。だってここ風呂やし？」

洗う場所で、洗い終わったのに…まだなんかある？

それとも…別のこと期待した？」

からかうように笑う意地悪な声…。

「っ…期待なんて…して…ない…」

「そ？」

じゃあ、早くパジャマ着るんやで。湯冷めするから。

俺も洗ったら出るから。」

引き締まった身体、綺麗に彩られた入れ墨…。

平気な顔をして髪を洗う姿…。

なんだか自分だけが狂ったようで、恥ずかしくて悔しくて…何も言い返せなかった。

(中略)

「イかせてほしい？」

ぐちゅっ…♡と音を立てて中に指を入れられ

「ひ…ああああ…つつっ」

プルプルと身体を小さく痙攣させてしまう。

「なあ、ちゃんとイかせてって言わな。イかせてあげへんで。」

京介さんはそう言うときリを舐めながら、中でグチュグチュ♡と指を動かしはじめた。

「ひ…ぐ…う、きもち…い…、だめつつっ、そこ…お…つつっ！」

身体を震わせ勝手に果てようとするけれど、京介さんはピタッと刺激を止めてしまう。

「は…あ…イきたい…よ…お…っ」

小さな声でヒクヒク泣きながら懇願するけど、京介さんからの返答はない。

ただもう一度クリと中を同時にぐちゅ…♡じゅるっ…♡と刺激されてしまう。

「あああああああ…っ、も…お、や、だ…イきたい、イきたい…よおおっっっ」

足の先まで硬直させ、必死で涙を流して訴える。

だけどその瞬間彼の指が私の中から抜けてしまう。

「は…あ、なんで、イきたい…イかせて…おねがい、もう無理…なの…っ…」

ヒクヒクと泣きながら、もうとつくに限界を超えた理性と身体を震わせる。

その時、ギシッとベッドがきしむ音が響いて、ぐっとな腕を掴まれた。

「っ…」

「ん？なんて？

聞こえへんかったわ。」

くすくすと笑いながら、私の両手を顔から外し、ベッドへと押し付け…指と絡ませる。

「っ…イきたい…イかせて…頭、変になっちゃう…っ」

（全容は製品版にて）